

Title	西周訳『奚般氏心理学』と西の人間性論
Sub Title	Joseph Haven's "Mental Philosophy" and Nishi Amane's theory of human nature
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.58 (1971. 12) ,p.171- 192
JaLC DOI	
Abstract	From 1875 to 1876, Nishi Amane had translated Joseph Haven's "Mental Philosophy," Gold and Lincoln, Boston, 1869 (the first edition, 1857), and published it under the title of "Haven-shi Shinrigaku." This book has two important significances in the history of Japanese moral ideas in the early Meiji period. First, Nishi found, in this book, many important philosophical terminologies such as "subject," "object," "reason," "understanding," "sensibilities," "deduction," "induction," "proposition," and so forth, and coined new words corresponding to these philosophical terms: for example, Japanese "shukkan," "kyakukan," "risei," "gosei," "kansei," "en-eki," "kinoh," "meidai," and so forth. These new words he made up have been made use of among Japanese philosophers until today. Therefore, whenever we philosophize in Japanese today, we cannot help making use of these words and might be influenced by Nishi's coinage which, in turn, was based upon both Haven's system of philosophy and Nishi's. Especially, since Nishi was the only philosophers in Japan in those days, most of his new words became the definite philosophical terms at once. Thus, Haven's "Mental Philosophy" had a great influence upon Japanese philosophy including moral philosophy through Nishi's translation. Second, this book made a great contribution to development of Nishi's theory of human nature. In this article, I have tried, first, to clarify what kind of theory of human nature Haven developed in this book, and, second, to trace to what extent Nishi's theory of human nature showed Haven's influence in Nishi's "Chisetsu" and other writings such as "Jinchiron" and "Johchikankeiron," and so forth.
Notes	名誉教授宮崎友愛先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0179">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0179</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 西周訳『奚般氏心理学』と西の人間性論

小 泉 仰

わたくしは、これまで『哲学』55集、56集に掲載した論文において、それぞれ西周の『百一新論』と『生性発蘊』の人間性論を取り扱ったのである。当論文においては、部分的には『知説』の人間性論<sup>(1)</sup>にも影響を与えたと考えられると同時に、『知説』や『人智論』の見解から離れて西の人間性論を大きく飛躍させた原動力ともなったと見られる『奚般氏心理学』（以後『心理学』と略す）を取り扱い、この書の西人間性論の変遷に果たした役割を検討してみたいと思う。

『心理学』は、Joseph Haven, *Mental Philosophy including Intellect, Sensibilities, and Will* (1857) の 1869 年版を西が翻訳したものである。残念ながら、わたくしは、この 1869 年版の原書を手に入れられなかったが、わたくしの見ることのできた 1879 年版の *Mental Philosophy*<sup>(2)</sup> は、New York: Sheldon & Company の出版であり、大きさは 8vo Crown, 本文 583 ページ、参考文献 7 ページ、全体で 590 ページの大部の書である。一方、西の訳書『心理学』は、明治 8 年 4 月、文部省印行として上・中巻が発刊され、つづいて明治 9 年 9 月に下巻が公刊された。わたくしが手に入れた『奚般氏心理学』は、明治 11 年 2 月の改版で、上冊、下冊の二巻からなり、上冊 728 ページ、正誤表 5 ページ、下冊 147 ページ、参考文献 17 ページ、つまり本文 875 ページ、ほか 22 ページ、計 897 ページからなる大きな本である。原稿枚数にして約 950 枚から 1000 枚になろうとする訳書である。

この訳述を完成する前後の西の仕事を見ると、かれは明治 6 年に陸軍省第一局第六課長の激職に就任し、同年 6 年から 9 年にかけては、かれの主著

『生性発蘊』(明6)を著述するとともに、『百一新論』(明7)と『致知啓蒙』(明7)を公刊し、さらに『明六雑誌』には小論文とはいえ「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」「非学者職分論」「駁旧相公議一題」「教門論一〜七」「煉火石造ノ説」「知説一〜五」「愛敵説」「情実説」「秘密説」「内地旅行論」(以上明治7年)、また「網羅議院ノ説」「国民気風論」「人世三宝説一〜四」(以上明治8年)をつぎつぎに発表していったのである。明治初期の学者がわれわれの想像に絶するような奮闘努力を重ねていたことが事実であるとしても、公務にあるかたわら、多量の著書・論文を発表しつつ、しかもこれだけ大部の訳書を完成するには、かなりの時間がかかったのではないだろうか。とくに本書において、西は、その序<sup>(8)</sup>に言うように、「理性」<sup>アンダスタンディング</sup>「悟性」<sup>センシビリティ</sup>「感性」<sup>センス</sup>「覚性」<sup>ディダクシオン</sup>「演繹」<sup>インダクシオン</sup>「帰納」<sup>アイデア</sup>「観念」<sup>プロポジション</sup>「命題」<sup>サブジェクト</sup>「主観」<sup>オブジェクト</sup>「客観」<sup>シンセシス</sup>「総合」<sup>アナリシス</sup>「分解」<sup>ビーイング</sup>「実在」などの新しい訳語を発明しながら訳さねばならなかったのである。そこで、この訳書はすくなく見積っても2〜3年はかかったのではないだろうか。

そうして見ると、この訳書の前半部分を完成したころに、『知説』を発表したと見ることができる。したがって、時期的に見て『知説』の人間性論は、すくなくとも『心理学』の前半部分の見解から影響をうけている可能性があると見ることができる。そして『心理学』の後半部分は、情意の問題を主として取り扱い、後に述べるように意重視の傾向を示すのである。西は、この後半から影響をうけて、しだいに『知説』を離れ、『情智関係論』や『生性割記』に現われる情緒・意志論を展開していったように思われる。

いま本書の全体の傾向とその中に展開されている人間性論を明らかにしながら、その内容が西の人間性論の形成と展開に対してどのような役割を果たしたかを検討してみることにしよう。

ヘヴンは、本書の序で本書が『心性ノ学ノ大綱目ヲ具シテ簡約ナルモ学問上ノ講論ニ供スヘク……一層完備一層簡約一層通暢ナル論述』を目的

にしていると述べている。この目的をみたすために、かれは、従来の心理学書の欠点としてあった「<sup>インテレキチュール・ファカルテ</sup>智ノ能力」だけを取り扱う傾向に対して、「<sup>センソビリティ・キル</sup>情ト意」の領域をもあわせ取り扱おうとしたのである。このように智情意の三者を心理学の対象領域として論述しようとしたヘヴンの見解は、西が『知説』において取った知情意の三分法説を横から支えるものになったとすることができる。もちろんヘヴンは、知情意を区別したとは言え、この三部分が手と足のように相互に独立な精神の部分であるとは考えていない。かれによれば、「<sup>メンタル・ファカルティ</sup>心ノ能力」は心の力、何かをする力、あるエネルギーを出す力、ある操作を遂行する力であり、厳密に言えば、ただ一つのものであって分割できないと主張されている。<sup>(5)</sup>このような心を一元のものとする見方は、『知説』にははっきり出てこないが、明治17年の『生性割記』には明らかに取り入れられている。<sup>(6)</sup>この心は、「其体中ニ住シテ、此美ナル城郭ノ此広クシテ且麗ハシキ区域ノ、真君タル心」である。<sup>スピリット (7)</sup>

では一元の心がどうして智情意に分けられるのであろうか。ヘヴンは、心は単一であるが、その働きの仕方または行動様式の違いによって智情意に識別されてくると考える。<sup>(8)</sup>しかしかれは、本書の前半部分ではこれらの機能の中で智に人間の心のもっとも重要な地位を与えているように見える。たとえば原書の智情意の記述に要したページ数を比較すると、ほぼ6:3:1の割合である。またかれは、智が人間をして動物の上に主人たらしめるものと言う。

「人ヲシテ、此地位ニ立タシムル者ハ、人ノ内部ニ、居ヲ占メタル智ニシテ、是人ヲシテ、凡百物界ノ主タリ、君タラシムル所ノ者ニシテ、此智アリテ、始メテ、吾人階級ノ最高巔ニ坐シ、今マテ視察シタル百界ノ曠野ヲ眺臨スルコトヲ得ルナリ」<sup>(9)</sup>と言うのである。このような『心理学』前半部分の智重視の見解は、『知説』の中の西の智主位主義を傍らから支援するものであったことは明らかである。そこで、智の分析から始めて、ヘヴン人間性論の全体をごく簡単に眺めてみることにする。

ヘヴンによれば、<sup>イントレクト</sup> 智 は「<sup>プレゼンタティヴ・パワー</sup> 表現ノ能力」「<sup>リプレゼンタティヴ・パワー</sup> 再現ノ能力」「<sup>リフレクティヴ・パワー</sup> 反射力」  
<sup>インテウイティヴ・パワー</sup> 「直 覚 力」の四つに区別される。<sup>(10)</sup>

まず表現力とは「<sup>センス・パーセプション</sup> 覚 性 知 覚」のことであり、<sup>センセーション</sup> 感 覚 と <sup>パーセプション</sup> 知 覚 からなる。<sup>(11)</sup> 感覚とは人が事物に接して初めに感じる「<sup>フィーリング</sup> 感 動」である。一方、その感覚を感覚として知り、どの身体<sup>オーガニズム</sup>の機官に受けたかを知り、さらに機官の外なる事物を<sup>コグニション</sup> 認識する働きが知覚である。かくて知覚は反省的思考や推論と区別され、「<sup>タダ</sup> 直チ immediate」である点に特色がある。<sup>(12)</sup> そしてこれらの感覚知覚を司る<sup>センス</sup> 覚 性 の機官は、「<sup>タツチ</sup> 触覚」「<sup>ヴァイジョン</sup> 視ルノ官」「<sup>ヒアリング</sup> 聴クノ官」「<sup>スメル</sup> 嗅  
<sup>テースト</sup> 「味」の五官からなるのである。

次に<sup>リプレゼンタティヴ・パワー</sup> 再 現 力 とは、五官に現われない対象を「<sup>コンシーヴ</sup> 理 会」したり「<sup>リプレ</sup> 現 現」したりする心の力である。再現の力にも、三つの種類が分けられる。第一は、「<sup>センス</sup> 覚 性」に現われない、今存在していない物体を「<sup>ソート</sup> 意思」の中に単純に再生する「<sup>シンブル・リプロダククティヴ・フアカルティ</sup> 単 純 再 現 力」であり、第二は、以前の感覚や知覚の対象として物体を認識する「<sup>コグニティヴ・フアカルティ</sup> 認 識 力」である。第三は、対象をあるがままにではなく、心の理想に応じて任意に修正した形で再生する「<sup>クリエイティヴ・フアカルティ</sup> 創 造 力」である。<sup>(14)</sup> 前二者が「<sup>メモリ</sup> 記性」と言われ、第三者が「<sup>イマジネーション</sup> 想像力」と呼ばれる。これら三者の共通の特色は、対象が感覚に与えられないでも考えられ、心に再現されること、直覚的であるよりむしろ「<sup>リフレクティヴ</sup> 反射省察的」であること、理性や<sup>センス</sup> 覚 性 の課題であるよりは<sup>アンダスタンディング</sup> 悟 性 の課題であること、さらにそこにできあがるものが「<sup>コンセプション</sup> 理 会」であることである。<sup>(15)</sup> さらにこの再現力は「<sup>ローズ・オブ・メンタル・リプロダクション</sup> 心 上 再 現 ノ 理 法」に従うものであり、この法則の根源は「<sup>プリンシプル・オブ・サジェスション</sup> 念ヲ提起スルノ本理」(暗示の原理)つまり「<sup>ローズ・オブ・アソシエーション</sup> 伴 生 ノ 理 法」である。<sup>(16)</sup>

一方、<sup>メモリ</sup> 記性は、始めの知覚の客観的要素を再現する働きに加えて、その再現主体とその知覚の時と処と条件とをかね合せて再現する認識力をも含む心の働きである。<sup>(17)</sup> これに対して想像力は、その基礎を過去にもっているとしても現に知覚したものの模写ではなく、心の創造に属している。そこで記性が「<sup>アクチュアル</sup> 現実的」で「時限過去」にかかわるのに対して、想像力は「<sup>アイ</sup> 理

ディアル  
想的」であり「時限」にかかわらない。

さて反射力は、心力の大部分を占める活動であり、事物の「性質」と  
「関係」にかかわり、「抽象」と「概括」にかかわる。この反射力には、  
「弁決」「抽象」「概括」「論弁」が数えられ、その「様法」  
には、「合成」または「総合法」と「分別」または「分解法」  
が識別されている。

まず総合過程とは、個別の複合概念の要素を合成し、一致不一致にもと  
づいて一般的概念およびその集合を構成する反省力の過程である。ここに  
は、いろいろな個物の共通性質を抽象して「一般概念」を形成し、  
その概念に従って対象を分類する能力の「抽象」があり、その抽象の  
中でも任意の根拠にもとづいた「類似」に従って対象を分類する「彙  
類」があり、さらにより科学的もしくは一般的分類法則に従って分類す  
る「概括」が識別されている。さらに「弁決」は「彙類」や「概括」  
を行なう精神活動であり、その表現が「命題」と言われる。

一方「分解法」は、「組織セル全体ヨリシテ、其中ニ包含シテ在ル所ノ  
特別ナル者ヲ開発スルコト」である。この分解をやや緻密に行ないながら  
一定の順序で並べられた命題群が「論弁」と言われるから、分解の運用  
を命題で表わしたものが「論弁」である。この論弁には「演繹」と「帰  
納法」があるが、ともに「分解的」であるから「分解法」を前提してい  
る。ヘヴンは、帰納法を「経験ニ本ツク論弁」と言い、個別例から一般原  
則を導出すると考えるが、その際ミルに従って自然と自然法則の一般的整  
合性の原理を前提するから、部分的に分析的であると考えるのである。

さらにヘヴンは、分解法中の「演題」をかなり詳しく論じており、西も  
そのため論理学に関する術語を新しく訳出しないわけにいかなくなったの  
である。かれが新しく訳出した術語の若干を挙げてみれば、前出した「命  
題」「演繹」「帰納」「演題」のほかに、「主位」「属位」「定言」「形  
質」「度量」「合式の命題」「実反対」「小反対」「差等反対」

コントラディクトリ ハイポセティカル モーダル トウ・プレミス マイナ・プレミス メージャ・プレミス  
「反 言 対」「約 契 体」「帯 様」「両 約」「少 約」「老 約」  
コンクルージョン マイナ・ターム ミドル・ターム メージャ・ターム ファイギュア  
「断 言」「少 極」「中 極」「老 極」「図」等がある。

ところで反射力は悟性の働きであり、その取り扱う概念も悟性の概念である。そこで悟性の抽象的概念の基礎となる第一次的原理や観念は反射力の対象にはならない。そこで、これらの原理を把握する働きとして「直<sup>インテュ</sup> 覚<sup>イテイズ・パワー</sup> 力」が要求されたのである。<sup>(25)</sup> この直覚力は、<sup>センス</sup> 覚性の領域に属さない「時間」<sup>タイム</sup>「空間」<sup>スペース</sup>「実 体」<sup>サブスタンス</sup>「因縁」<sup>コーズ</sup>「正直」<sup>ライト</sup>「邪曲」<sup>ロング</sup>などの「資始ノ観念」<sup>プライマリ・アイディア</sup>をとらえる「理性」<sup>リーズン</sup>の働きである。

以上述べてきたヘヴンの知力は、覚性、再現力、反射力、直覚力の四区分を含むが、プラトンの幻想、信念、悟 性、<sup>エイカジャ</sup> 理性の区分に類似しており、さらに再現力と反射力を悟性としてまとめるならば、多少の違いはあれカントの感性、悟性、理性の区別にも対応しているとも言える。<sup>(26)</sup> 今以上の智に関するリストを表にまとめてみれば、次のようになる（次頁1図参照）。

以上の智に対して情はどうであろうか。智は情に先行し、情は智を含み<sup>(27)</sup> それに依存すると考えられている。この情には「単純ナル情（情 緒）」<sup>シンブル・エモーションズ</sup>「錯 綜セル品性カラノ情（情 款）」<sup>エモーションズ・オブ・ア・コンプレックス・キヤラクター</sup>「欲」の三種が識別される。<sup>(28)</sup>

まず天性的な単純なる情つまり情緒から見よう。ここでは動物的本性に属する「本能上ノ情」と、智を前提とした「理性上ノ情」が分けられる。前者は「喜 憂」<sup>ジョイ・ソロー</sup>からなり、「愉快」<sup>チャフル</sup>「悲哀」<sup>グリーフ</sup>「悵 鬱」<sup>メラソコリー</sup>および「同 感ノ歓喜、同感ノ憂悶」<sup>シン</sup>などの情が含まれている。一方理性上の情は、智の反射力を使用して自己を見たり、自分を他人と比較して見たとき<sup>(29)</sup>に生まれてくる情緒である。この情そのものは非難すべきものではないが、驕傲、驕慢据傲の人、<sup>プライド</sup> 虚 驕の人、<sup>ブラウド・マン</sup> 譁<sup>(30)</sup>張の人、<sup>ヴェイン・マン</sup> 倨傲の人のような、度を越えた情の集中や、いつわりの自己に情が集中する際には、非難されるべきものとなる。

ところで理性上の情には「笑 楽ノ享 楽」<sup>インジョイメント・オブ・ザ・ルデイクラス</sup>「新 奇ト 奇 異」<sup>インジョイメント・オブ・ザ・ニュー</sup>「享 楽」<sup>アンド・ワンダフル</sup>「美 妙・高 妙ノ享 楽」<sup>インジョイメント・オブ・ザ・ビュティフル・アンド・サブライム</sup>および「道德上ノ情」<sup>モラル・エモーションズ</sup>が

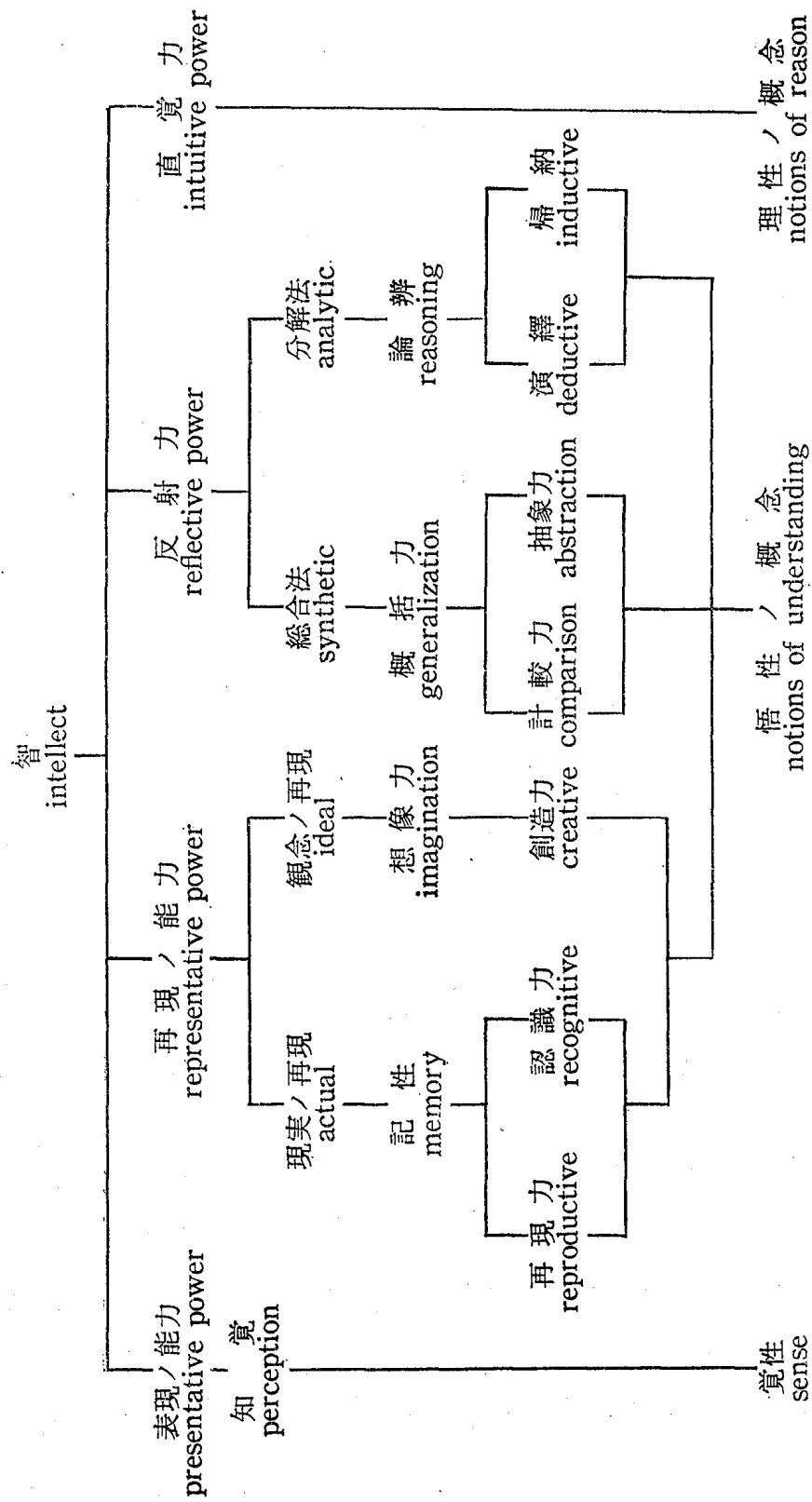


图 1



識別されている。笑樂を引き起すものは、觀念・事物の「不<sup>インコングラユアス</sup>恰<sup>アクシデンタル</sup>好」さが不意に出現して、人を驚動させる点にある。そしてその出現が偶然の場合には「失錯<sup>サブライズ</sup>」「誤言<sup>（8）</sup>」と言われ、故意の場合には「諧謔<sup>ウイット</sup>」「雙関話（オトシバナシ）<sup>パン</sup>」「調戲<sup>パレスク</sup>」「滑稽<sup>ザ・モック・ヒロイツク</sup>」「雙関謎語<sup>ダブル・ミーニング</sup>」「諷語<sup>サタイヤ</sup>」「冷語<sup>サーカズム</sup>」などがそうである。また新奇奇異の享樂には「驚愕ノ感動」による快感とこれに正反対の「厭<sup>アンニユイ</sup>倦」が数えられる。また美妙高妙の享樂には、美や崇高に対する「驚<sup>アドミレーション</sup>歎」とその反対の醜に対する「厭<sup>デイスガスト</sup>惡」が挙げられている。一方、正邪の判定を行ない、行為者を承認または非難する「智<sup>インテレクト</sup>」は、それに応じた感性の働きを呼び起し、「称<sup>アドミレーション</sup>美」快・不快を含む「道德ノ<sup>モーラル・</sup>感動<sup>ファイリング</sup>」すなわち「躬行ノ正直ナルニ於テノ自得<sup>サテイスファクシオン・イン・ヴィユ・オブ・ライト・コンダクト</sup>」をもたらすのである。この道德感情がもっともよく知られるのは、「独<sup>コンシヤンス</sup>知」の中であると言われる。独知の中で人は「堪忍力」つまり道德的に耐える力を持つことができるし、「悔恨ノ力」すなわち「悖戾ナルニ於テノ悔恨<sup>リモース・イン・ヴィユ・オブ・ロング</sup>」を持つことができる<sup>（83）</sup>。以上が單純の情の内容である。

第二の「情<sup>アフエクシヨNZ</sup>款<sup>（84）</sup>」は、対象に善または惡をもたらそうとする「善<sup>ベネヴォレント</sup>意」または「惡<sup>マルヴォレント</sup>意」とそれに応じた「愉悅<sup>デイライト</sup>」「適<sup>サテイスファクシオン</sup>意」などの情を伴う複雑な性格の情である。そこでこれを善意・惡意の二つに分ければ、前者は愛<sup>ラブ</sup>、後者は惡<sup>ヘイト</sup>が多様化した情である。ヘヴンは、前者を「親族ノ愛<sup>ラブ・オブ・キンドレッド</sup>」「朋友ノ愛<sup>ラブ・オブ・フレンズ</sup>」「恩人ノ愛<sup>ラブ・オブ・ベネファクターズ</sup>」「住处並ニ本国ノ愛<sup>ラブ・オブ・ホーム・アンド・カウントリ</sup>」に分け、後者を「忿<sup>リゼンテイメント</sup>恨」と呼んだのである。

善意の親族の愛は、人間性に根ざした「普<sup>ユニヴァーサル</sup>通<sup>ソサイエティ</sup>」の情であり、「社会」の根底をなす情であって、「慈育ノ愛<sup>ベアレンタル・ラブ</sup>」「孝順ノ愛<sup>フィリアル・ラブ</sup>」「友悌ノ愛<sup>フラターナル・ラブ</sup>」を含むと言われる。朋友の愛は「親愛<sup>フレンドシップ</sup>」または「友情<sup>フレンドシップ</sup>」とも言われるが、これと深くかわる恩人の愛は、「恩人ノ仁愛<sup>ベネヴォレンス</sup>」と「我ノ感謝<sup>グラチテユード</sup>」を含むものである<sup>（85）</sup>。「住处並ニ本国ノ愛」つまり「愛<sup>ベイトリオリテツク・エモーション</sup>国ノ情<sup>レース</sup>」は、「人種」の分裂に起因し、種族間の鬭争心によって強化される。「開<sup>シヴィライゼーション</sup>化」はこれを弱めるが、「国<sup>ナショナル・</sup>」<sup>プライド</sup>「裕」は開化にもかかわらず国家の繁栄と力、歴史的伝統によって目覚めさ

(36)  
せられると言われる。

一方、「<sup>マルヴォレント・アフエクションズ</sup>悪意<sup>リゼンテイメント</sup>ノ情款」は、「<sup>イン</sup>忿恨」によって代表される。それは「<sup>ジュリ</sup>傷害」をうけたときに相手に向って発する本能的な情であり、その中には「<sup>エンヴァイ</sup>忌嫉」「<sup>ジーラシ</sup>嫉妬」「<sup>リヴエンジ</sup>報復」の三態がある。忿恨は正義感にも通じ、かならずしも不道德ではないが、適度をこえれば「<sup>アビューズ</sup>過失」に落ち入る。忌嫉は他人の幸福などを見て発する「<sup>ミーン・ディグレイディング</sup>卑劣・賤汚」な情であるが、嫉妬は男女の恋愛の中だけに現われる情である。報復は思慮を使用した忿恨の表現であり、ただ憎む相手に対して自分の気持をはらすことである。いずれも思慮ないし選択を伴った場合の情のみが道徳的判断の対象となるのである。以上が『情款』の内容である。<sup>(37)</sup>

第三の欲は、<sup>デザイア</sup>享樂物を愛するゆえに欲する働きと、<sup>イト</sup>苦の対象を厭うゆえに厭悪する逆の欲を含んでいる。欲は、過去の経験したものを将来に求めようとし、求める対象が欠けているかぎり止まない行動への「<sup>モータイズ・パワー</sup>起動力」である。これはまた、人の形体の資質から生じる「<sup>アペタイト</sup>嗜欲」すなわち「<sup>アニマル</sup>肉体欲」と心の要求から生じる「<sup>ラショナル・デザイア</sup>理性欲」の二つに分けられる。ヘヴンは、<sup>デザイア</sup>肉体欲の中に「<sup>デザイア・オブ・フッド</sup>飲食ノ欲」「<sup>デザイア・オブ・セツクシズ</sup>男女ノ欲」「<sup>デザイア・オブ・エクサーション</sup>陳力ノ欲」「<sup>デザイア・オブ・リポーズ</sup>休憩ノ欲」を含ませ、<sup>デザイア・オブ・ハツピネス</sup>理性欲には「<sup>デザイ・オブ・ノーリツジ</sup>幸福ノ欲」「<sup>デザイア・オブ・パワーズ</sup>知識ノ欲」「<sup>デザイア・オブ・ボセツション</sup>権勢ノ欲」「<sup>サン</sup>所有の好ム欲（<sup>デザイア・オブ</sup>貪饞、<sup>ソサイエティ</sup>吝嗇）<sup>デザイア・オブ・エスチーム・オブ・アザーズ</sup>倫交（<sup>ホープ</sup>マタハ結交）ノ欲」「<sup>ファイア</sup>他ヨリ敬重ヲ受クルノ欲」を含ませた。さらに欲の変形としてかれは、希望と恐懼とを挙げたのである。

以上述べてきた感性全体を図に表わせば、図2, 3, 4のとおりである。

それではヘヴンの『心理学』の最後部を占める意はどうであろうか。本書前半部がすでに述べたように、<sup>ウィル</sup>智に重点を置き、やや智主位主義の傾向があったとすれば、後半部の「意」の叙述は、意を重視し意を心そのものとみなす考え方がかなり展開されるようになるのである。すなわち、意は、肉体力・精神力を含めて自己を統制しようとする場合に頼らなければならないものであり、「心裏凡百能力ノ中ニテ、此至要ナル能力ノ作用」であ

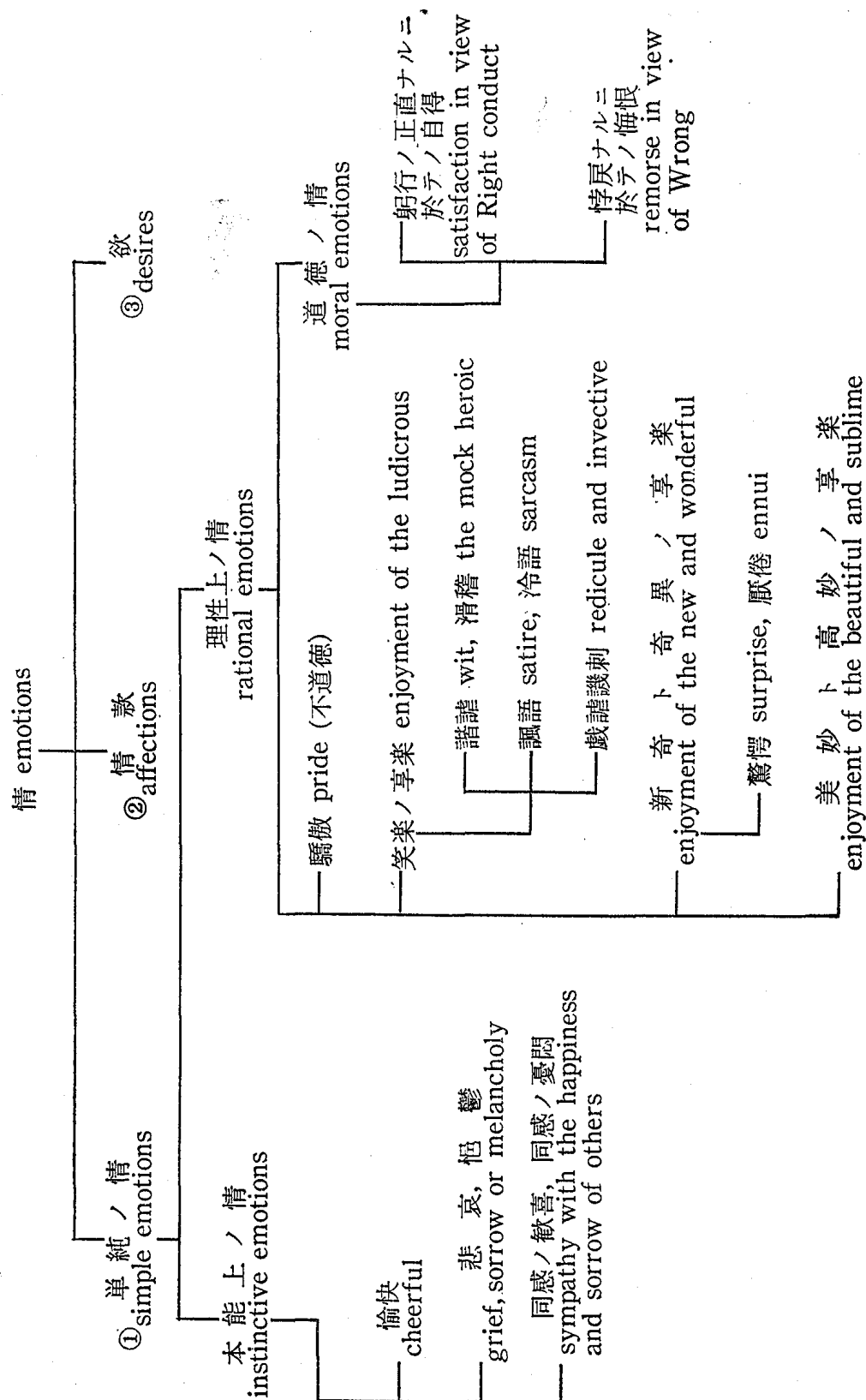


図 2

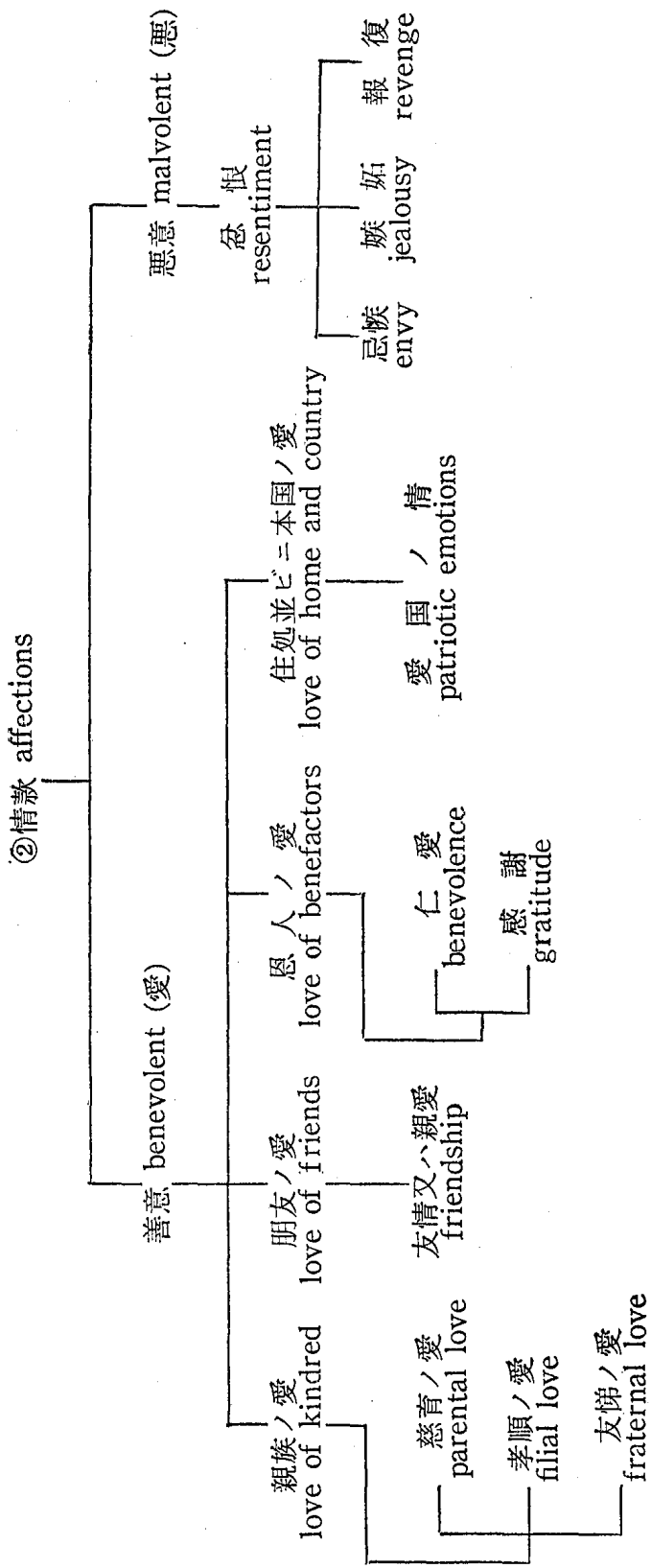


图 3

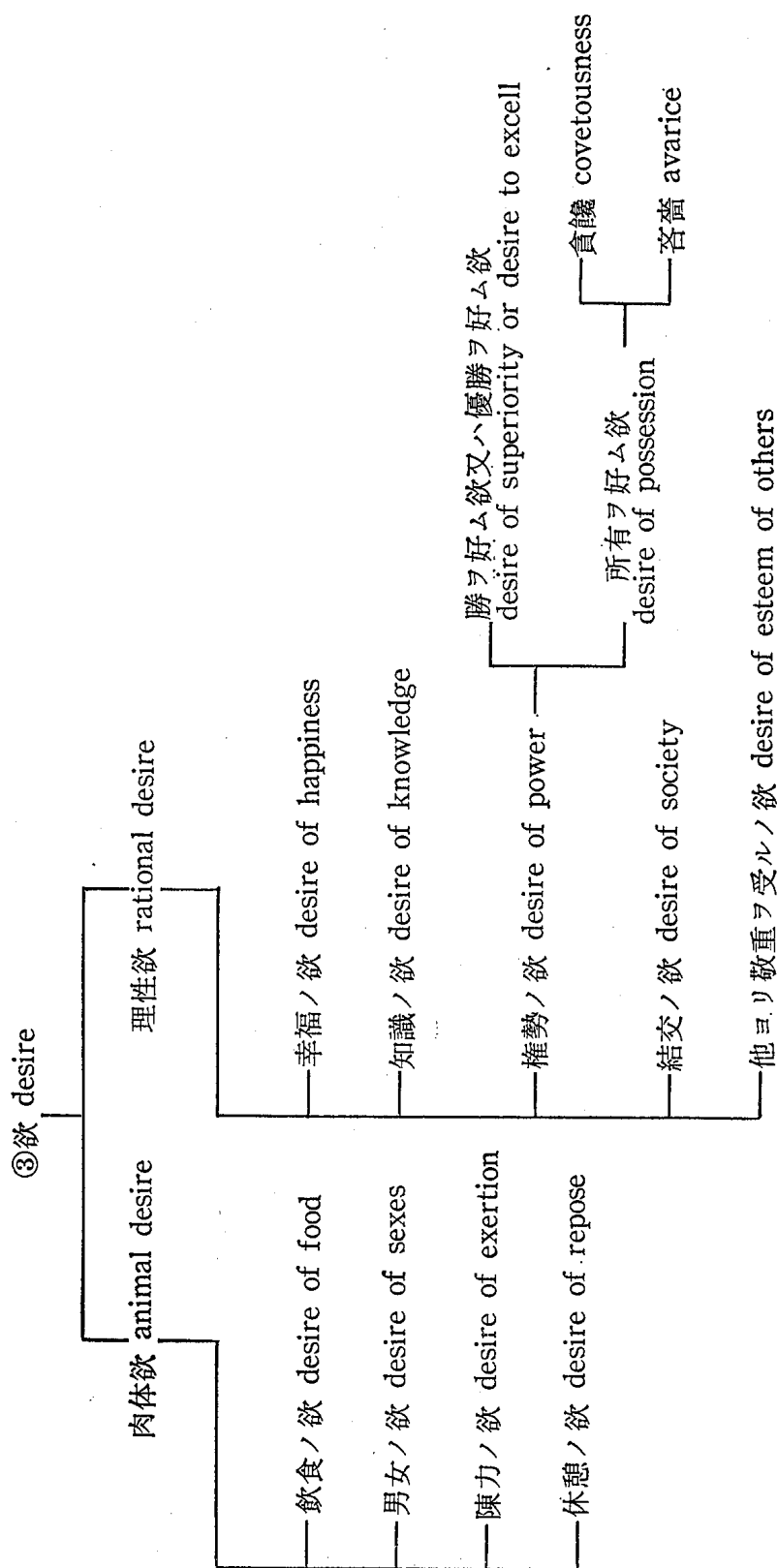


図 4

る。しかもそれは、「心ノ施行力」と言われ、「吾人、心ニ覺エテ、故サラニ為シタル事ハ其事タル、靈智ヨリ発シタルモ、感動ヨリ発シタルモ、或ハ此兩者ヨリ発シタルモ、皆是、意ノ作用ナリトシ、凡テ、吾人有意ノ運動ハ、力ノ形体、若クハ、心裏ノ無意ノ運動ト差別シテ、皆意ノ発動ニ、直チニ繼ク効驗ナリ」と言われている。このような表現は、意を智情意中もっとも重要なものとみなしているものと解釈することができる。さらに、ヘヴンは、「意ト云フハ、此心自己（「心そのもの」の意）ニテ、欲スルコト、即チ、欲スル勢力ヲ、有スル事ニテ、他ノ者ニ非ス、心ヨリ別ナル者ニ非ス、又小刀ノ柄ト刀ト別部ナルカノ如クニ、心ノ部分ニモ、非サルナリ」と言<sup>(39)</sup>い、意すなわち心君という見解を含むような表現を取っている。そこで、『心理学』前半部分の智重視の傾向が、後半部分にいたって意重視の傾向に変化しているように見える。しかも前半の智重視の表現には、心は一体だが能力として智情意が識別されると言うが、智即心の見解はないのに、後半の意重視は、意即心（心君）の見解を伴う。そこで『心理学』前半と後半の智主位主義と意主位主義の間に不統一と意への傾きが見えるのである。おそらく本書の訳者であった西周は、前半を訳出していたと思われる明治7年には、本論文の最初に指摘しておいたように、この前半の智主位の見解に部分的に影響を受けて『知説』で智を心君とする立場を取ったということもありうる。これに対して、本書後半を訳出していたと思われる明治8～9年には、本書後半の意主位主義の傾向にあるていど動かされてきたのではないかとと思われる。このことがやがて明治十七年の『生性割記』の意主位主義の伏線となっていたのではないであろうか。

このような智情意を統轄するものとしての意には、1)「<sup>ダイザイア</sup>欲」と「<sup>モラル・オブ</sup>道德上<sup>リゲーション</sup>ノ義務即チ本分」とその相克を含む「<sup>モーティヴ</sup>動機」、2)「<sup>ダイヴァーシテイ・オブ・オブジェクト</sup>目的ノ岐異ナルコト」「<sup>リバーテイ・オブ・セレクション</sup>撰取スルノ自在ナルコト」「<sup>デリベレーション</sup>思慮」「<sup>ザ・ファイナル・デিশーシジョン</sup>最後ノ決断」を含む「<sup>チョイス</sup>選択」、3)「<sup>ゼキユテイブ・ヴァオリシジョン</sup>施行上ノ執意」の三者を含ませている。<sup>(40)</sup>これを図示すれば、図5のとおりである。

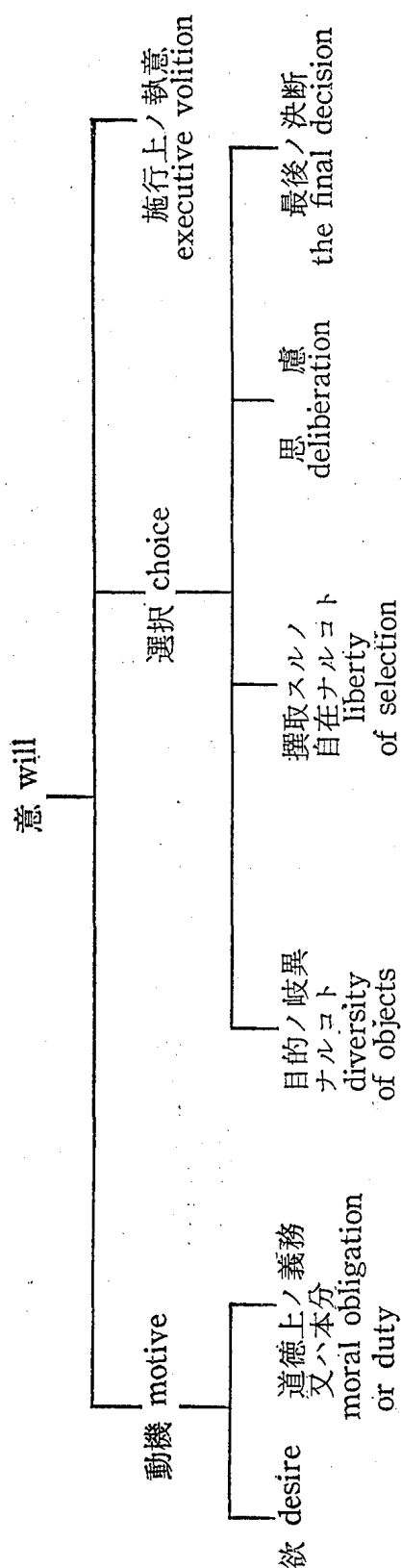


図 5

さて、上に述べてきたヘヴンの人間性論は、訳者の西周の人間性論に対してどのような影響を与えたのであろうか。

この問いに対して、われわれは、『心理学』訳出の前後、すなわち明治7年から明治10年前後にわたる西周の著作と『心理学』の人間性論とを比較しながら、答えていくことにしよう。まず明治7年の『知説』に対しては、本論文ですで見えてきたように、<sup>(41)</sup>『心理学』の前半部分において取られた智重視のヘヴンの見解が、『知説』の智主位主義を側面から支援したもののようである。さらにわたくしが別の論文において指摘するように、『知説』の智情意三分法説を部分的に支えたものと思われる。

一方、『知説』(図6)において展開された「結構組織ノ知」<sup>(42)</sup>とヘヴンの智分析図1の部分とを比較してみると、いずれも<sup>アナラシス</sup>分解法の中に演繹と<sup>シンセシス</sup>帰納を入れており、総合法と別箇のものと考えている点で、両者はかなり近似的であるようである。これらを図示してみよう(図6, 7)。

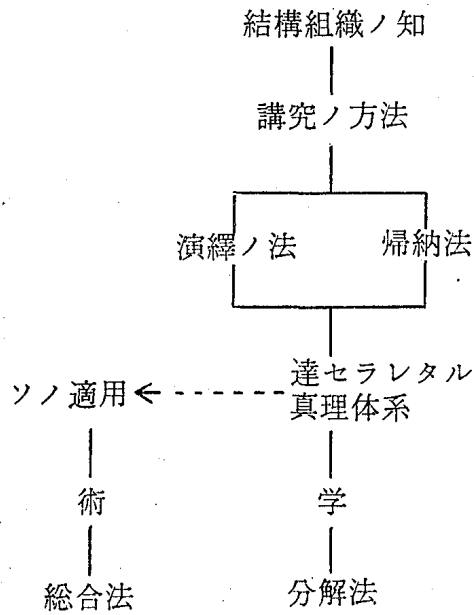


図 6

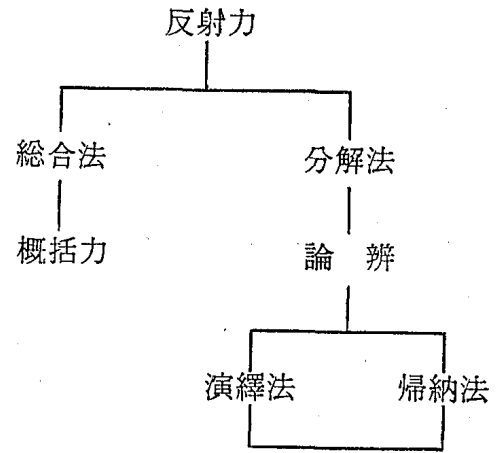


図 7

これに対して、コントの人間性論を展開した『生性発蘊』では、総合法・分解法は観<sup>コンテンプレーション</sup>察の項目に配属され、帰納と演繹は省<sup>リフレクション</sup>察の項目に配属され、それぞれ別箇のものとされている。<sup>(43)</sup>すなわち、

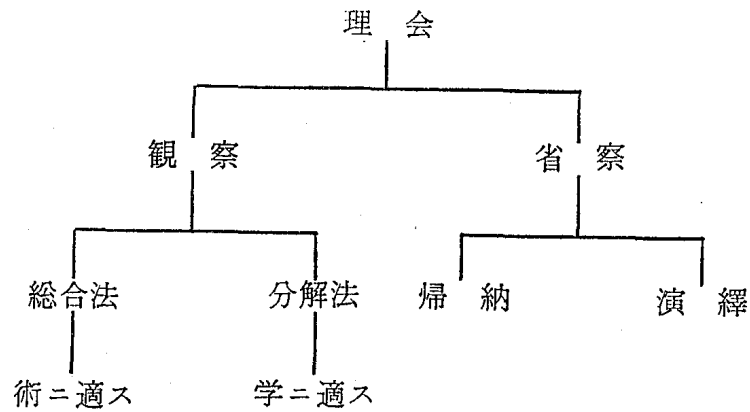


図 8

図 6, 図 7, 図 8 を比較すればわかるように、西の『知説』は、演繹・帰納、分解法・総合法の解釈についてコントよりはヘヴンの見地に近づいていることがわかる。ただし、コントが総合法を<sup>ビーイング</sup>実在にかかわるゆえに術に



適するものとし、分解法を抽象的な性格にかかわるゆえに学に適するものとした点は、西の『知説』にも踏襲されており、たとえば「大要分解法<sup>アナリチカル</sup>ノ化学ハ之ヲ学ト謂フベク、<sup>シンセテイカル</sup>総合法ノ化学ハ之ヲ術ト謂フヘシ」<sup>(44)</sup>とも言っていることでもわかる。この点は、明治3年の『百学連環』で取扱われたハミルトンの学術の区別の線を一応くずしていないのである。<sup>(45)</sup>

一方、『知説』では、ヘヴンの情および意の分析はほとんど参照されていなかったのである。このことは、一つには『知説』が智を主として取り扱い、情や意を問題にしていなかったということにも原因があろう。しかしもう一つには、前にもふれたように、『知説』執筆当時、西が『心理学』の情意の部分の完全には訳しきっていなかったのではないかという時間的問題も考えられるのである。

これに対して、ヘヴンの情の分析は、『知説』より後の『情智関係論』や『美妙学説』（明治十年前後）の中に参照されている痕跡が見られる。たとえば、西は、情を「凡人間倫理の大綱より細事件に至るまで」その用を果たすものであると言いながら、つぎのように表現しているのである。すなわち、

「此情といふ者は、其大源は肉体欲即ち人欲ニ根さす者なりと雖も、夙に靈性欲、即ち物欲と混合し易くして、飲食男女安佚より竟に権勢の欲、声色の欲、勝克の欲、錢貨の欲と相混同し以て一種の情操偏癖となることあり。」<sup>(46)</sup>

この表現は、ヘヴンの肉体欲と理性欲（図4参照）を借りており、その内容を大部分ヘヴンから借りていることがわかる。ただしヘヴンが以上二種の欲をいずれも天賦で本能的なものとするのに対して、西は、飲食男女安佚のような肉体欲を情の根源と見ており、靈性欲をやや開発された欲と見ているらしい点で、なおかれは、『百一新論』『生性発蘊』の中に見られた物理より心理へという基本的な態度を維持しているように見える。

さらに西は、『情智関係論』の中で情を「愛の情」と「悪の情」に分け

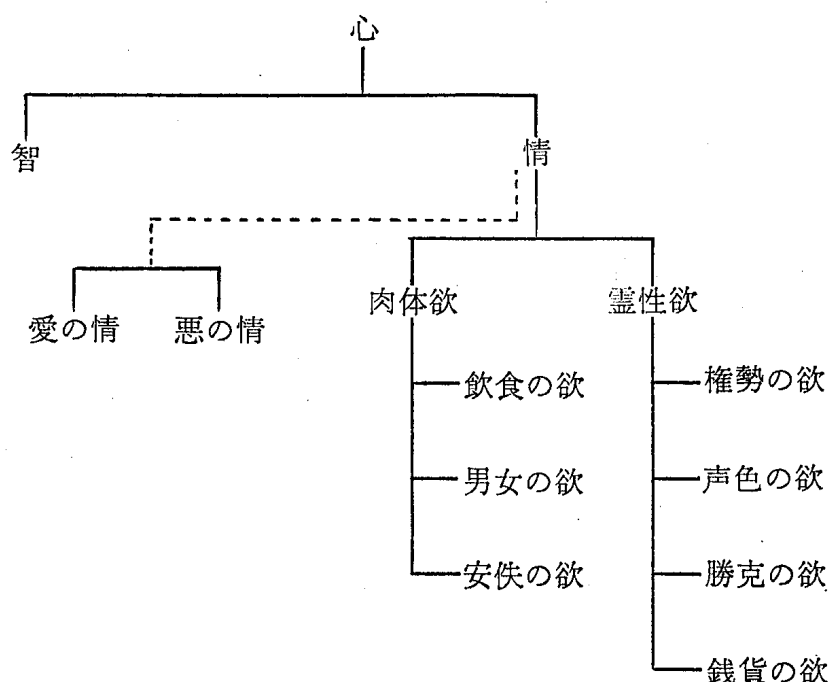


図9 『情智関係論』における情の分析

て説明をしている。この論文の中では、「肉体欲」と「靈性欲」の区別と他方で「愛の情」と「悪の情」の区別がどのようなかわりをもつものであるのか不明であるから、今別箇の区別として図示してみると、図9のようになる。

上図9とヘヴン『心理学』の図3および図4とを比較すれば、図9の中に含まれるものはすべて、図3、図4の中に対応物を見いだすことができるものである。さらに『生性発蘊』の本能分析表<sup>(47)</sup>（情分析を含んだ表）と比較してみれば、西の『情智関係論』は、コントよりもはるかにヘヴンの情分析表に近いことがわかる。さらにヘヴンの情分析表は、西の関心を余程深く引いたものと見えて、『哲学関係断片』十六、二十、二十五、二十六<sup>(48)</sup>などにおいて西が情の分析を試みようとしたメモの中に散見されるのである。

他方、後に西が関心をもって読んだ Alexander Bain の Mental and Moral Science<sup>(49)</sup> についての西の情分類メモには、図9に類似した情分類表

はなく、したがって、西の『情智関係論』の情分析は、もっぱらヘヴンのそれを基礎にしていたように思われる。

一方、同じ頃に執筆されたと見られる『美妙学説』には、ヘヴン『心理学』における情分析の影響が、かなりはっきりと見てとることができる。たとえば、「善シ、悪シ、<sup>かへ</sup>怜ユシ（カハユシ？）、憎シ、嬉シ、楽シ、悦バシ等」の情を挙げ、これらは自己の利害に関する「道德上ノ情」に属することが多いと指摘する一方で、美妙学上の固有の情として「面白シ、可笑シ」の二情を挙げるのである。というのは、これらの二情は、「己ノ利害得失ト相関シテ発スル者」ではないからであり、「唯其物ヲ面白シト視、其物ヲ可笑シト視ルマテ」であるからである。<sup>(50)</sup> しかも「面白シ」という情の原因は、複雑で不明なところが多いが、「可笑シ」という情がどうして生起するかについては、「物ノ規則ニ合ヒ能ク齊整ト続キタル 処ニ意外ノ変化ヲ起シタル時、可笑シト云フ情ノ発スルコトト見ヘタリ」と言うのである。このような「可笑シ」という情の生起説は、すでに述べたようなヘヴンの<sup>ザ・ルディクラス</sup>「笑 楽」の情生起論をそのまま踏襲したものであると言ってよいであろう。

以上のように、ヘヴン『心理学』の情分析論は、明治十年前後の西の諸論文の中に部分的に吸収され、西の見解の基礎の一つとなったことは疑いないであろう。

では、ヘヴンの意分析についてはどうであろうか。すでに述べたように、これは『知説』にはまったく影響を与えていない。おそらく『知説』の執筆時には、『心理学』の後半部とくに意の分析の部分は、訳業が進んでいなかったのではないかという疑問を、すでにわたくしは提出しておいたのである。

また明治十年前後の作と言われる『人智論』『情智関係論』などにも、ヘヴンの意分析の影響は現われず、それらの論文は、『知説』の主張であった智主位説がうけつがれており、とくに後者の論文では智による情の支

配がうたわれている。そこで、この頃には西の人間性論は、ヘヴン『心理学』の後半部に現われる意重視の傾向の影響は、ほとんど見られないと言  
ってよい。

もちろんヘヴン『心理学』後半の意重視の見解は、西のその後の意主位  
主義に移行していく上での一つの礎石になっていると見ることができる  
が、このヘヴンの見解から西がどのようにして『生性割記』の意重視の見  
解へ到達していくかについては、まだ解明すべき点が多く残されているよ  
うに思われる。この点は、またの機会に究明したいと思う。

註

- (1) 拙論『『知説』における西周の人間性論』は、都合により次回に掲載するこ  
とにした。
- (2) 早稲田大学図書館蔵
- (3) 西周訳『奚殷氏心理学』明治11年2月、文部省印行、心理学翻訳凡例。二。
- (4) Joseph Haven, *Mental Philosophy including Intellect, Sensibilities, and  
Will*, 1879, New York: Sheldon & Company, Preface, IV-V, abbr.  
M. P.
- (5) 『心理学上』三十; M. P., p. 29.
- (6) 西周『生性割記』、『西周全集』一卷、宗高書房。p. 138.
- (7) 『心理学上』十五; M. P. p. 22.
- (8) 『心理学上』三十; M. P., p. 29.
- (9) 同書。十五; M. P. p. 22.
- (10) 同書。四十一; M. P., p. 35.
- (11) 同書。八十一; M. P., p. 61-62.
- (12) 同書。六三; M. P., p. 63.
- (13) 同書。九五-百五; M. P., p. 68-72.
- (14) 同書。百四十六; M. P. p. 95.
- (15) 同書。百四十六; M. P., p. 96.
- (16) 同書。百五十七; M. P. p. 101.
- (17) 同書。百八十三-四; M. P. pp. 114-5.
- (18) 同書。二百八十四; M. P., p. 163.

- (19) 同書. 二百八十六; M. P., p. 166; 三百三; M. P., p. 172.
- (20) 同書. 三百七; M. P., p. 174.
- (21) 同書. 三百八, 三百十一; M. P., p. 175, 176.
- (22) 同書. 三百十九; M. P., 180; 三百二十二; M. P., p. 182.
- (23) 同書. 三百二十九; M. P., p. 189.
- (24) 同書. 三百五十; M. P., p. 194.
- (25) 同書. 四百十九; M. P., p. 229.
- (26) ヘヴンは、知性論の文献リストの中に、ロック、リード、スチュワート、ブラウン、クーザン、デカルトらにならべて、カントの批判書とプラトンの『国家編』を挙げていることでも、かれの構想の根拠が知られる。
- (27) 『心理学下』二〜三; M. P., p. 378.
- (28) 同書. 十四, 十五, 十七-十八; M. P.; pp. 383-386.
- (29) 同書. 十四, 六十〜六十一; M. P., pp. 383-4; pp. 409-410.
- (30) 同書. 七三; M. P., p. 417.
- (31) 同書. 八十一, 八十四; M. P. pp. 420-422.
- (32) 同書. 九十〜九十一; M. P., pp. 425-427.
- (33) 同書. 百十一〜百十六; 435〜437.
- (34) 同書. 百十八〜百七十六; M. P., pp. 441-469.
- (35) 同書. 百四十一〜百四十五; M. P., pp. 452〜454.
- (36) 同書. 百四十五〜百五十三; M. P., 454-58.
- (37) 同書. 百五十三〜百七十六; M. P., pp. 458〜469.
- (38) 同書. 百七十七〜二百六十; M. P., pp. 473〜514.
- (39) 同書. 第三区, 八; M. P., pp. 520-1.
- (40) 同書. 十四〜三十二; M. P., pp. 523〜531.
- (41) 拙論『『知説』における西周の人間性論』未発表論文
- (42) 同論文掲載図; 『知説』 pp. 460-462.
- (43) 拙論『西周の『生性発蘊』とコントの人間性論』哲学 56 集, 三田哲学, 1970, 10.
- (44) 『知説』全集一卷 p. 461.
- (45) 拙論『西周による統一科学の試み』哲学54集, 三田哲学, 1969, 11.
- (45) 西周『情智関係論』『西周全集』一卷, 宗高書房, pp. 474-475.
- (46) M. P., p. 489.
- (47) 拙論『西周の『生性発蘊』とコントの人間性論』 p. 10.
- (48) 『西周全集』一卷 宗高書房, p. 187, pp. 192-3, pp. 201-4.

- (49) 同書, pp. 205-207.  
 (59) 同書. 『美妙学説』, p. 489.  
 (51) 同書. p. 491.

## Joseph Haven's "Mental Philosophy" and Nishi Amane's Theory of Human Nature

*Takashi Koizumi*

From 1875 to 1876, Nishi Amane had translated Joseph Haven's "Mental Philosophy," Gold and Lincoln, Boston, 1869 (the first edition, 1857), and published it under the title of "Haven-shi Shinrigaku." This book has two important significances in the history of Japanese moral ideas in the early Meiji period. First, Nishi found, in this book, many important philosophical terminologies such as "subject," "object," "reason," "understanding," "sensibilities," "deduction," "induction," "proposition," and so forth, and coined new words corresponding to these philosophical terms: for example, Japanese "shukkan," "kyakukan," "risei," "gosei," "kansei," "en-eki," "kinoh," "meidai," and so forth. These new words he made up have been made use of among Japanese philosophers until today. Therefore, whenever we philosophize in Japanese today, we cannot help making use of these words and might be influenced by Nishi's coinage which, in turn, was based upon both Haven's system of philosophy and Nishi's. Especially, since Nishi was the only philosophers in Japan in those days, most of his new words became the definite philosophical terms at once. Thus, Haven's "Mental Philosophy" had a great influence upon Japanese philosophy including moral philosophy through Nishi's translation. Second, this book made a great contribution to development of Nishi's theory of human

nature. In this article, I have tried, first, to clarify what kind of theory of human nature Haven developed in this book, and, second, to trace to what extent Nishi's theory of human nature showed Haven's influence in Nishi's "Chisetsu" and other writings such as "Jinchiron" and "Johchikankeiron," and so forth.